

巻頭言

昨年(1992年)の夏、米国ニューハンプシャー大学で行われたPME 16*には参加したが、続いてカナダで開かれたICME 7には仕事の都合で参加できず、この方は直接の見聞ではないので申し訳ないけれども、「これまでに比べて会議に対する貢献度が極めて低かった」**とのことである。これまでの貢献度もそんなに高くははなかったはずだから、今回の状況は推して知るべしである。ICME 7には二百人を越えるわが国からの参加者がおったというが、そのうち発表者はどれ位であったのだろうか。

数学教育の研究にはその国固有の研究問題が多数あるとしても、そのような問題の発生源や解決に関する研究の多くは、視野を拡げて数学教育研究の中に位置づければ、事情の異なる国・地域の研究者、実践者にとっても有効な情報となる。このことはわが国が米国の情報をすべて取入れているかにみえること、これを決してを良しとするのではないけれども、取入れる可能性があること、を考えてみれば否定し得ないであろう。研究というものは微細なものを扱うのではなく一般的な大枠を扱うものであるのだから、研究と称しているものが仲間うちでは理解されても、思想や信条を異にする外国研究者に理解され難いものであるならば、それは研究と言うに値しないか、あるいは我々が人間としての資格に欠けるかのいずれかである。

研究情報は他人に理解可能なかたちで公開されることを前提としている。今日、外国ではわが国の数学教育に関する研究情報の流れの悪さに懐疑の念をもち、その公表を強く期待している。PME 16において口頭発表した共同研究(湊, 鎌田)に対して、発表終了直後にJRME編集委員のF.Lester氏から同誌への投稿を促された。このことは、研究内容への関心だけではなく彼等に理解可能な日本の研究を文字通りResearchしていることの現われだと私はみている。外国語という大きな不利さを背負っているが、例えば英語で論文を書く仕事は、我々が何らかのかたちで必然的にかかわる数学をより深く理解することにもつながるだろう。数学は学問の典型として西欧の思想に関係し、文章を構成する際もこの思想に依存するところ大だからである。

外国語で論文を書かなければ駄目だというのではない。初期の数学教育学論究には東北地方の数学教育研究者が積極的に投稿し、紙面をかざった。わが国の数学教育学建設に最も貢献したのは東北地方の研究者ではなかったか。

東北数学教育学会が我々同好の士の会であるだけでなく、わが国の内外に貢献する学会として大きく成長することを期待したい。

(注)

* PME: International Group for the Psychology of Mathematics Education, 今年のPME 17は7月18日から23日まで筑波大学で開催される。

** 茂木 勇: 1993; 研究活動を国際舞台へ, 日本数学教育学会誌 75-1, P.1.